

# 『癖者ぞろい』研究(1)―演出家ブレインワーム―

久保寺昌宏

## 序

いうまでもなく、ドラマは人間関係のあらゆる側面を映し出す鏡である。『癖者ぞろい』<sup>(1)</sup>はその人間関係のドラマを、ヒューマー (humour)<sup>(2)</sup> という切り口で描いた作品である。この喜劇の登場人物たちは、お互いをヒューマーという尺度で測っている。気質、気分等と訳されるこの言葉は、また流行と結びつき、時代の相も反映させている。例えば父息子の世代間のずれ、そのずれを効果的に利用して両者に仕えている召使は変装と巧みな演技でみんなを元の鞘に収める。

本稿で特に明らかにしてみたいのは、召使と主人、変装、演技というキーワードを手がかりにして、劇全体における召使ブレインワームの役割について再考することである。それは、おそらく、作者ベン・ジョンソンの基本的な劇作術を理解することになるだろう。

## ブレインワームの冒険

この喜劇の幕を下ろす時、クレメント判事 (Justice Clement) は召使ブレインワームの今日の大活躍を絶賛し、晩餐会の主賓としてこう言って招待する。「私が選ぶのは一ブレインワームだ！ 私がいま愛を求めるとしたら、ほめてやるとしたら、この相手しかいない。きょうのブレインワームの冒険の数々を、物語にして孫たちに聞かせてやったらきっとすばらしい反応が返ってくることでしょ。——そう、きっと盛大な拍手喝采が。」

Here is my  
mistris. BRAYNE-WORME! to whom all my addresses  
of courtship shall haue their reference. Whose aduentures,  
this day, when our grand-children shall heare to be made a  
fable, I doubt not, but it shall find both spectators, and  
applause.

(V. v. 86-91) (傍線筆者)<sup>(3)</sup>

ブレインワームはクレメント判事にとっては愛の対象 my mistris である。それほど、判事はこの召使の活躍、つまり aduentures 「冒険」に魅了されたのだということができよう。さて、この

fable「物語として孫の代にまで語り継がれることになるブレインワームの adventures「冒険の数々」について、少し整理してみることにする。

#### 召使たち<sup>(4)</sup>

『癖者ぞろい』には、このブレインワーム以外にも、召使が登場している。最初にウェルブレッドから若主人エドワード・ノーウェル宛の手紙を届ける名指しされないServant、それに、商人カイトリーの召使のキャッシュ、さらには、クレメント判事の書記のロジャー・フォーマルが上げられよう。彼らの役どころは、ただうろうろするばかりのものであり、書記のフォーマルは後述するよう、ブレインワームの餌食になるほど間の抜けた役柄である。<sup>(5)</sup> さて、このクレメント判事に賞賛されるブレインワームの「冒険」について少し詳しく見てみよう。それは変装して軍人、書記、執行吏を演じ、老主人の目を欺き、若主人の結婚を助けたことにある。つまり、老主人エドワード・ノーウェルは同名の息子宛に届けられた手紙の封を切り、その内容を見てしまう。息子の親友であるウェルブレッドがならず者と見た父親は、息子を心配するあまりその後をつける。その途中で事情が分かっているブレインワームが軍人に変装して、主人であるノーウェルにフィッツソードという偽名を使い召使として雇ってもらうことに成功する。

さらに見ていく前に、先ずブレインワームが最初に兵士に変装して登場する場面で何を狙っているのかその台詞に耳を傾けてみよう。

S'Lid, I cannot choose but laugh, to see my selfe translated thus, from a poore creature to a creator; for now must I create an intolerable sort of lyes, or my present profession looses the grace: and yet the lye to a man of my coat, is as ominous a fruit, as the *Fico*. O sir, it holds for good politie euer, to haue that outwardly in vilest estimation, that inwardly is most deare to vs. So much, for my borrowed shape. Well, the troth is, my old master intends to follow my yong, drie foot, ouer *More-fields*, to *London*, this morning: now I, knowing, of this hunting-match, or rather conspiracie, and to insinuate with my yong master (for so must we that are blew-waiters, and men of hope and seruice doe, or perhaps wee may weare motley at the yeeres end, and who weares motley, you know) haue got me afore, in this disguise, determining here to lye in *ambuscado*, and intercept him, in the mid-way. If I can

but get his cloke, his purse, his hat, nay, any thing, to cut  
 him off, that is, to stay his iourney, *Veni, vidi, vici*, I may  
 say with Captayne CAESAR, I am made for euer, ifaith.  
 Well, now must I practice to get the true garb of one of  
 these *Lance-knights*, my arme here, and my—yong master !  
 and his cousin, Mr. STEPHEN, as I am true counterfeit  
 man of warre, and no souldier !

(傍点筆者) (II. iv. 1-23)

「まったく笑っちゃうなあ、このおれがこんなぐあいに変装しちゃうなんて。つまりただの人間だったのが、新しい人間を作り出すなんて。いまからおれは、とんでもない嘘を作り出さなきゃなるまい。でないと、せっかくこんな軍人の姿になってもなんにもならないからな。だがこういう姿の人間が嘘つき呼ばわりされたりすると、軍人の面目にかかわることだから、決闘ざたにもなりかねない。そうだから、心の中ではどんなにいい嘘だと思っても、表向きは嘘ほどけしからんものはないという態度をとるのがいい手なんだ。おれの変装のことはこれで終り、と。ところで、実は、うちの老主人が、けさ、ムアフィールドを越えてロンドンまで、若主人のあとをつけて行こうとしておられる。そこでこの追っかけっこ、というより企みだが、それを知ってるこのおれは、若主人に取りいるためにも——だっておれたち青いお仕着せを着せられた使用人なんて連中は、何とか出世したいと思いつながら使われているやつは、そうでもしなきゃ、主人が代替りしたときにばかを見なきゃならなくなるんだから。そしていっぺん人からばかにされたとなると——。まあ、そんなことでおれはこの変装をして先まわりしてるってわけだ。ここに待ち伏せして、途中でじゃましようという計画だ。ご主人のマントでも財布でも帽子でも、何でもいから取りあげて前進を妨げることができさえしたら、あのローマの英雄シーザーみたいに、来たり、見たり、勝てり、と言えるのさ。出世は絶対、たしかなものになる。さて、これから、こういう槍持ちの歩兵はどういうスタイルでいればいいのか、ちょっと練習しておかなきゃ。腕はこうして、それから——若主人だ！それにそのいとこのスティーヴンさんも。おれがにせものの軍人なのがまちがいないのと同じにまちがいないぞ。」(傍線筆者)

またこの台詞にも語られているように、どのような恰好をしているのかがわかる。ブレインワームのサイドプレイは、エドワードの馬鹿な従兄弟スティーヴンに少々かかわっている。軍人に変装したブレインワームはエドワードと一緒に来るスティーヴンにトレドの名剣を売りつけることにまんまと成功するが、後で、ばったり出くわしたとき、エドワードとウェルブレッドには自分の正体を明かしている。そうすることによって、ブレインワームは実に見事に第一の危機を乗り越える。次の活躍は第二幕第五場老主人に取り入る場面においてである。

老ノーウェルが時代の変化を嘆きながら登場し、「息子のところに送られてきた例の手紙のことがどうも気になる。それにこの国の若い連中が私が若かったころとは、暮らし方も育ち方もすっかり変わってしまったことに驚かすにはいられない」と独白する。

I cannot loose the thought, yet, of this letter,  
Sent to my sonne: nor leaue t'admire the change  
Of manners, and the breeding of our youth,  
Within the kingdome, since my selfe was one.  
(II. v. 1-4)

ブレインワームはそこにうまく来合わせたノーウェルに気づき、傍白でこう言う「ご主人だ！よし、向かって行くぞ！獲物の味をおぼえたおれだ、ここまではうまくやって来たんだ」

My master? nay, faith haue at you: I am  
flesht now, I haue sped so well.  
(II. v. 67-68)

自分の演技がどの程度まで通じるか主人を使って挑戦することにする。ト書き *He weepes*. (86-87) にあるように泣いて見せ、自分の兵士としての経歴、現在の窮境を訴え、ついに主人の同情心を動かすことに成功する。名前を聞かれ FITZ-SWORD (122) という偽名を名乗る。「どうだね、あんたをいま雇ってくれる人がいるとしたら、まじめに、謙虚に、正直に、誠実につとめる気はあるかね?」という言葉を引き出すことに成功する。この成功に気を良くしたブレインワームは、「ああ、この腹にたがでもはまっていないことには、笑って笑って破裂してしまうぞ！これほどはりさけそうな腹なんて見たこともない。まったく、年を経た古狐のくせに、こんなにくろっとだまされてしまうものかなあ？こうなるとおれは、ご主人の秘密は全部握れるってことになる。おれを通して、若主人も握れることになる。おれのまじめさをためそうって言ってたが、こっちはご主人のがまん強さをためすことにしよう。」ブレインワームはノーウェル親子をほぼその手中に入れたことになる。

O that

My belly were hoopt now, for I am readie to burst with  
laughing! neuer was bottle, or bag-pipe fuller. S'lid, was  
there euer seene a foxe in yeeres to betray himselfe thus?  
now shall I be possest of all his counsell: and, by that  
conduit, my yong master. Well, hee is resolu'd to proue my

honestie; faith, and I am resolu'd to proue his patience:

(II. v. 133-39)

ここでのブレインワームの変装演技は第五幕場でノーウェルに「言葉づかいまで、私におまえだとわからせないほど変えてしまえるなんて!」Is it possible! or that thou should'st disguise thy/language so, as I should not know thee? (V. iii. 81-82) と言わせている。

ところで、召使ブレインワームは「軍人、兵士」の変装をして、顔に傷を描いたり、バンソコウをつけたり、しゃべり方と話の内容を選んだりしているが、この喜劇には、変装とはいえないが、軍人を演じる人物が登場する。それがあの文豪チャールズ・ディケンズがアマチュア劇団で自ら率先して演じたボバディルである。ボバディルは軍人かぶれとでもいう人物であり、ウェルブレッドの慰み役のマシューの相棒である。両者は、「看板の絵に描いたみたいな軍人さん、それからやっぱりかっこうだけの詩人さん。こんなにせものを二人も、うちの戸口にぶら下げておきたくはない」you signe o'the Souldier, and picture o'the/*Poet* (but, both so false, I will not ha' you hang'd out at my/dore till midnight) while we are at supper (V.v.49-51) とクレメント判事が拒絶する人物である。ブレインワームの扮する軍人とボバディルが演ずる軍人の違いがこの喜劇の見所になる。

さて、ブレインワームはその軍人に関して続けてこう言っている。「ああ、とことんだましちまうことになりそうだ。おれなんかを雇って、きっと軍人なんて二度と見たくもないというふうになっちゃうぞ。軍人のいるところ、軍服や鉄砲の見えるところには近付きたがらなくなるぞ。マイル・エンドの練兵場の演習なんて、大きらいだと、死ぬまで言いつづけることになるぞ。かまうもんか。いますぐにうまくだましてさしあげられなかったら、このおれのことを問拔けなベテン師と呼んでもらっていい。いや、若主人を追っかけるのを途中でじゃまするつもりだったが、それよりはずっとおもしろいことになった。さあ、ついて行こう。雇ってもらえてほんとによかった!

oh

I shall abuse him intollerably. This small piece of seruice,  
will bring him cleane out of loue with the souldier, for euer.  
He will neuer come within the signe of it, the sight of  
a cassock, or a musket-rest againe. Hee will hate the  
musters at Mile-end for it, to his dying day. It's no matter,  
let the world thinke me a bad counterfeit, if I cannot giue  
him the slip, at an instant : why, this is better then to haue  
staid his iourney ! well, Ile follow him : oh, how I long to  
bee imployed.

(II. v. 139-48)

この場面で、ブレインワームの変装は次から次へとその効果を発揮し始めるが、途中若主人とその親友ウェルブレッドの二人にだけは自分が変装したブレインワームであることを明かしている。この点が、重要なところである。なぜならば、変装はどこかで必ず見破られることになっている。例えば、不注意にも、スティーヴンがそばにいたとき、変装したブレインワームをその名前で呼びかけ、それが変装したブレインワームであることがわかってしまう瞬間がある。これからもう詳しく見ていくように、ブレインワームの変装はそれ自体、外面は言うにおよばずその演技演出は芸術の域に入っている。それほど、完璧な変装であるにもかかわらず、クレメント判事の権威の前ではあっさりとその兜を脱いでしまう。

次の危機はいうまでもなく大団円におけるクレメント判事の脅しの前に正体を現す瞬間であるが、この場面に行き着く前にもう少し、ブレインワームの他の登場人物とのかかわりを見ておきたい。ブレインワームは主人老ノーウェルにフィッツソードとして雇われた後に、副筋において、大活躍をする。それは、先ず、ウェルブレッドのとりまきであるマシュー、ボバディルとウェルブレッドの腹違いの兄ダウンライトとの喧嘩にかかわっておきる訴訟である。ボバディルはマシューと一緒にウェルブレッドに会いに、カイトリーの家を訪れるが、兄ダウンライトの怒りに油を注ぎ、これが次から次に起こる喧嘩の原因になってくる。

(続く)

#### 注

- (1) この*Every Man in His Humour* の邦題『癖者ぞろい』の由来については村上淑郎訳『癖者ぞろい』、ベン・ジョンソン戯曲選集、1、国書刊行会、1991の解説に詳しい。
- (2) このヒューマーについては、今日のユーモアの意味ではなく、「体液」の意味であり、四種類の体液があり、それらのバランスを保つことが人間の健康と精神にとって必須であると考えられていた。III.iv.16-27 参照。
- (3) テキストはFolioを使用。ベン・ジョンソンのデヴュー作はイタリアのフロレンスを舞台にした、登場人物名もイタリア風のQuarto 1604と1613のFolio 版があり、ジョンソンが戯曲作品を『作品集 (*The Works*)』として世に問うたとき全面的に改訂した。なお本稿において村上淑郎訳を利用させていただいた。
- (4) 召使という役割は私たち日本人にとってなじみのない職業ではあるが、英国近代の戯曲には必ずといっていいほど、召使が登場し、しばしばその召使たちが戯曲の大団円において重要な役割を演じている。
- (5) このブレインワームは『錬金術師』におけるフェイス＝ジェレミーと『ヴォルボーニー』におけるモスカの演技力は持ち合わせているが、彼らの狡猾さはない。